Vol.815　（月刊）毎月１日発行　Kenko Shinbun　2024年（令和６年）10月１日　無料

新健康協会では、新しい健康法を伝える「健康新聞」を毎月発行し、人間の持つ治癒力や適応力をお伝えしています。肉体的、精神的なことでお悩みの方もぜひ御一読ください。

健康新聞

発行所
発行人　新健康協会
〒813-0001
福岡市東区唐原６－７－１
TEL:092-661-1531
https://shinkenko.jp

次の御論文は、明主様（当協会の教祖）が、昭和二十九年に発表されたものであります。
世界平和と心身共に健全な人間作りを目指す活動に御理解を頂ければ幸甚です。

再びジャーナリストの考慮を望む

これは一般宗教には当てはまらないかも知れないが、少なくとも本教としては言わざるを得ないのである。それは何かというと、学者やジャーナリストの宗教に対する見方であって、必ずと言いたい程科学の目をもって批判する事である。ところがよく考えてみると、これ程不合理な話はあるまい。何となれば、科学は唯物観念をもって物を見るに反し、宗教は唯心観念をもって見なければならないからである。

つまり、科学は形而下的分野に属し、宗教は形而上的分野に属しているからである。即ち、前者は地面に立って屋根瓦の表面を見るに対し、宗教は屋根の上から地面を見下すようなもので、この主客転倒に今日まで気付かなかったのである。

この意味において滑稽なのは、宗教学者達が学問上から宗教を論ずる事である。

考えてもみるがいい、仮にもしそれが妥当としたら、その宗教の開祖よりも学者の方が上になることになるから、そういう学者こそ一派を立てて生神様になれば、成功疑いなしであろう。また新興宗教にしても、そのほとんどは既成宗教を基本としている以上、同様の事が言えると思う。しかし、それはそれとして、今日学者やジャーナリストが新宗教を批判する場合、まことに皮相浅薄な見方である。例えば現当利益、特に病気治しなどは低級だとか、金儲けが目的だとか言って、肝心な宗教理論には一指も触れないのは、おかしな話ではあるまいか。これについて私の言い分を書いてみるが、他の宗教は知らないが、少なくとも我教に至っては、現代の学問で分かるようなそんな低い程度のものではない。全く想像もつかない高度の文化的超宗教であって、偉大なる救いの業である事は、声を大にして言いたいのである。言うまでもなく、既成宗教的に如何に巧妙な理論や説教をもってしても、それだけで人間を救う事の出来ないのは事実が示している。一例を挙げてみれば、今仮に目の前に苦しんでいる病人にむかって、枕元で百万陀羅有難いお説教や教典を聞かせたとて、なるほど心の慰めにはなるが、病気そのものを治すことは出来ないのは分かりきった話である。故に確実に病気を治し、健康を回復させ、貧乏も救われ、一家幸福になるとすれば、恒産あれば恒心ありで、自然不正や不道徳も減るに違いないから、よりよき社会となるのは当然である。これが宗教としての真のあり方であって、これ以外に何があるかである。故に、この意味からいうも、彼の釈迦、キリストが、遺憾ながら万人の病気を救い得なかったため、二千有余年を経た今日といえども、相変らず人類は病貧争に苦しみつつあるのである。としたら、人間はいつになったらこの桎梏から免れる事が出来るであろうか、おそらく見当はつくまい。としたら、実に情ない話である。これによってみても、今日まで世に現われた幾多聖者や賢哲にして、真に救う力を持った者は一人もなかったのである。それがため、やむなくその諦めを説くのが宗教の建前となってしまったのも、宜なるかなである。ところが喜ぶべし、私はこの夢のごとき真の平和幸福世界を実現する力を、神から与えられたのである。これは自惚れでも何でもない。現に不幸に悩める人々を救いつつあり、これが本教の救世事業である。

以上によって、私という人間が如何なる存在であるかが分かったであろう。そうして、今日の世の中を大局から眺めてみると、現代文明は実に大いなる誤謬に陥っている。今その二、三の例をあげてみるが、現在日本における最大悩みである食糧問題にしても、また世界的悩みである病気の問題にしても、それを現わしている。しかもそのどちらも、進歩は行詰り状態にあって、解決どころか、ますます溝は深くなるばかりである。これらに対し、私は根本的解決の方法を神示によって知り得た以上、今や日本はもとより、世界全体にわたって知らしめつつあるので、もちろん主眼とするところは全世界指導者階級の眼を覚まし、新文明の何たるかを知らしめることである。つまり、小学生の学力をして大学程度にまで引上げる事である。

以上の意味において、私の説くところあまりに超越しており、学者もジャーナリストも容易に理解できないので、かえって一種の恐れさえ抱くらしいのである。それというのも、本来ならば大いに謳歌礼讃すべきが本当であるのに、かえって無批判的に非難する人や、触れるのを避ける人などある事実である。その現われとして、私が最近発行した「結核信仰療法」及び「奇蹟集」の両著にしても、日本の三大新聞は一致してその広告を引受けない事である。その理由をただせば言を左右に託して、真相を言い得ない苦しさであって、これは本教係りの者から聞いた話である。

これでは、現在の日本は言論の自由がない訳で、しかもこの自由の抑圧者が大新聞としたら、ほとんど信じられない程で、おそらく世界の文明国中例がないであろう。しかしそれも無理はないかも知れない。何しろ私の説たるや、あまりに現代科学を超越しており、ちょうど人力車時代に飛行機を見せるようなものであるからである。

（２面につづく）

浄霊体験記

２ページ
３ページ

- 病気の心配が消え 安心と感謝の日々
- 覚悟した死から 救われて今が…
- 浄化作用によって 命の継ぎ足しを…

また、昔からいつの時代でも、既成学問を覆えす程の画期的発明、発見、新説等を発表するや、例外なくその時代の識者から誤解と迫害を受けるのは、歴史が示している。ここに先駆者の悩みがあるのである。特に日本の知識人程それがはなはだしいのは、例えば今日、世界的偉人として万人から仰がれているキリストや釈迦のごとき大聖者より以上の人間は、永久に現われないと決めている事である。今一つは、日本には外国人より優れた人物は出ないとしている迷妄である。これが国民感情に染み込んでいる以上、私とそうして私の仕事が認められないのも当然であろう。

それがため、私の言説も事業も、頭から否定してしまい、調査検討など思いもよらないらしいのである。特にこの傾向はジャーナリストに多い事は、本来なれば、外国にも例を見ない程の画期的偉大なる私の聖業であるから、すぐに正邪善悪を検討しそうなものだが、そういう事は全然ない。私は思う。もし研究の結果いささかでも疑問の点があり、社会上マイナスと認めたら、断固排撃し葬り去ると共に、反対に正しい説で、社会人類にプラスであるとしたら、大いに援助すべきではなかろうか。それをいつまでもうやむやにしている態度は、前記のごとき恐怖感のためか、触らぬ神に祟りなし的事勿れ主義のためか、解し難いのである。

以上私の思うままを書いたのであるが、要するに私はジャーナリストとしての当然な責務を希望するに止まり、それ以上他意はないのである。ここに再度の考慮を求むる所以である。

浄霊によって病苦から救われると共に運命が向上し、幸せになられた方々の体験手記でございます。

ゼンソク・オデキ

病気の心配が消え 安心と感謝の日々

宗像支部　小方直義（59）

私は生まれて間もない頃から様々な病気になりました。以下の体験談は私が母から聞いた話です。

昭和四十年八月二十九日、私は小方家の次男として生まれました。私は生後一ヵ月頃からよく風邪を引いていたため、その度に病院へ行き、治療をしていたそうですが、症状が治まってもまた風邪を引く…という状態を繰り返していました。

するといよいよ風邪は激しさを増し、生後五ヵ月目には気管支炎を起こしました。その状態がなかなか治まらないので、熱冷ましや咳止めの薬、注射（ペニシリン）を打ち、急に気管支炎が激しくなった時は、昼夜を問わず病院に駆け込んでいたそうです。その結果、ゼンソクの発作が出るようにもなりました。呼吸困難の時もあったそうで、その時は病院だけではなく、院長さんの自宅に駆け込んだこともあったそうです。

この当時、私の祖母が目の病気を患っていました。病院で目の治療をしても良くならず、反って悪化していき失明同様になっていました。そんな時、近所の方が祖母に「浄霊を試してみたら」と新健康協会を教えてくれたそうで、祖母は母に「支部に行ってみたい」と言ったそうです。しかし、祖母一人で行ける状態ではなかったので、母が私を抱え、一緒に付いて行きました。母は、今まで祖母が眼病を治すためにいくつもの病院をさまよい、精神的にも落ち込んでいましたので、また今度も騙されるのでは…と思ったそうです。

しかし初めて支部に行き浄霊を受けてみると、祖母は徐々に笑顔が出るようになったそうです。何か今までと違う…と感じた祖母はそれから浄霊を受けるようになりました。

また、私もゼンソクの状態でしたので、支部の方から勧められて浄霊を受けるようになりました。私が浄霊を受けている間、母は浄霊の原理や浄化作用のお話を聞き、その話にとても驚いたそうです。今まで治そうと思って治療していたことが、実は反対に症状を悪化させていた…と気付いたそうです。

病院では薬をたくさん飲まなければならず、注射も「痛い、痛い…」と泣き叫ぶ私を押さえつけて打っていたそうですが、浄霊はまったく痛い目にあうこともなく、楽な気持ちで受けられますので、私を浄霊で元気にしてあげたい…と思ったそうです。

すると、浄霊で熱や咳が落ち着いていき、少しずつ食欲も出て来て徐々に快復していったそうです。この時、私はもうすぐ一歳という頃でした。

また、祖母の眼病も浄霊で落ち着いていき、とても喜んでいたそうです。

頬の傷…跡形もなく

昭和四十一年八月十三日、お盆の頃、私の右の頬に十円玉くらいの腫れ物が出来たそうです。するとそこから膿が出始め、膿が出るとそこに穴が空いてしまったそうです。母は、顔に傷が残るのでは…と心配になっていたそうですが、この時も浄霊を続けて受けますと、数日間で穴のところに肉が盛り上がっていき、その後は跡形もなくきれいに良くなりました。

母は、自宅でも私の浄霊が出来るように…との思いで、八月二十一日、祖母と共に入会しました。

母が入会したすぐ後、私は熱が出て全身にオデキが出来たそうです。全身に出ていましたので、抱くところがない程の状態だったようですが、浄霊を続けて受けますと、オデキが出てから三日目には黒いトウ（かさぶた）が次々に乾燥して取れていき、五日目には完全にきれいになったそうです。治ってゆく状態がはっきりと目に見えていたので、母は「こんなに早くきれいになるなんて…本当にすごい…」と感激したそうです。母は、私の病気のことが心配でゆっくり寝ることも出来なかったのに、浄霊を知ってからは常に安心感があり、感謝の日々を過ごせるようになった…とよく私に話してくれました。

それからこの協会は奇跡を頂くことが出来る信仰ではないか…ということが家族、親戚に広まっていき、私の家族、父方の兄弟、母方の兄弟までもが浄霊を受けるようになりました。

◇

おかげ様で私は、小中高と順調に日々を過ごすことが出来、就職、結婚と、五十九歳の現在まで元気に過ごすことが出来ています。五十歳頃には、再就職して三年間働いていたところから「人員削減」ということで突然解雇され、三度目の再就職で悩んだこともあったのですが、明主様にしっかりとお縋りしていると、再就職することが出来ました。

母のおかげで今では私たち家族も会員になり、幸せの日々を過ごせております。心から感謝申し上げます。

（福岡県宗像市）

浄化作用

人間には体内の毒素（＝不純物）を排除して健康を促進しようとする働きがあります。

例えばカゼの場合、体内にあってはならない毒素を溶かすために熱が出ます。溶けた毒素が鼻水やタンとなって排出されるので体の中が掃除され、清浄化されます。

その毒素排除の過程を「浄化作用」と言います。ですから浄化作用は、熱や痛みを伴うので苦しみがありますが、体を健康にする大切な清掃作用でもあるのです。

ネパール

〈激しい頭痛〉

覚悟した死から救われて今が…

カトマンズ支部
レヌカ・バラ（47）

一九九九年、私は二十二歳の時に、頭の右側に痛みを感じ、頭の中で何かが動いているような感じを覚えました。病院で診てもらったところ、「蓄膿症が原因でしょう」と言われ、薬を飲み始めたのですが、症状は改善されませんでした。お医者さんの言われるとおり、鼻に入れる薬や治療をしましたが全く治らず、反対に病気は悪化していきました。当時私は美容室を経営していましたが、仕事が出来なくなって店も売却しました。

病気が進行するにつれて、肩の周りがしびれて、頭と右腕の痛みも我慢出来ないほどの状態になりました。このような状態でも夫の事務作業の手伝いや子どもの世話、家事等があったので、薬を飲みながら日々を過ごしていました。

それから四年後の二〇〇三年、二十六歳の時に突然激しい頭痛に襲われ首や肩も動きづらくなりました。体中が熱く、夜も眠ることが出来ませんでした。その上、食事も摂れなかったので、心配した夫と一緒に病院へ行きました。診察の結果、「首の神経が圧迫されているので支障が出ている…手術は出来ないが、神経に効く薬を飲みながら首や手の運動をした方が良い」と言われました。私は医者の言うとおりにしましたが、頭痛や体の灼熱感は治りませんでした。

私はこのまま死ぬのだろう…と思っていました。どうしたらいいのか…何をやっても治らない…このまま何日生きられるのだろうか…と、いつも自分に問いかけていました。子どもたちも小さいのに、私がいなかったらどうなるの…と悩んでいたとき、以前、道端で見かけた、「新健康協会」の看板を思い出しました。たしか、健康になれるところだったはず…そう思った私は、一度そこへ行って、どういう方法で健康になるのかを聞きたいと思いました。しかし私一人では行くことが出来なかったので、弟に連れていってもらいました。

支部に行くと、何人もの人が浄霊を受けていました。不思議な光景で、何も分からない私は少し戸惑いを感じましたが、当時のカトマンズ支部長であったラズ・スレスタさんが明主様と浄霊について分かりやすく話してくれたので安心することが出来ました。そして浄霊を受け始めたとき、頭の中で何かが走っているような気がしました。何か感じるものがある…そう思った私は浄霊を続けることにしました。

二日目、浄霊を受けていると少しずつ楽になっていくのが分かりました。

三日目、頭と喉から何かが流れていくような感じがしたかと思うと、眠気を感じました。その日は朝八時に支部で浄霊を受けましたので、すぐに家へ帰り何も食べないまま深い眠りに落ちました。午後三時頃まで眠っていました。目が覚めると、体は汗でびっしょり濡れていましたが、体が軽くなり、食事を摂ることも出来ました。その日の夜も食事を摂ることが出来、またぐっすりと眠ることが出来ました。

四日目、朝から体は軽く、痛みや灼熱感も和らいでいました。夫は、「どんな力で、ここまで良くなったの？カトマンズに長く住んでいるけど、こんな力は知らなかった…不思議だ」と言っていました。たくさん治療をしても全く治らなかったのに、たった三日間で良くなって、表情が明るくなったことにびっくりしていましたので、夫をカトマンズ支部に連れて行きました。それから更に一週間、毎日浄霊を受けて信じられないほど元気になりました。私の体は空を飛べるのではないか…と思う程に軽くなりました。私にとって浄霊は、「明主様からの贈り物と祝福」とも言える奇跡でした。

◇

これは、息子（次男）の話ですが、息子が三歳の時、いつも咳が出ていて、腹部が腫れていました。あまり食べることも出来ず、食べても吐いてしまっていましたが、二週間浄霊を受けると、信じられない程に良くなり、咳も止まりました。お腹も良くなって食事も出来るようになりました。

これによって私は明主様への信仰と信頼を高めて、二〇〇五年二月十九日に会員になりました。夫もその三年後に入会しました。本当に幸せな日々を過ごすことが出来ています。

私たち家族を救って下さった明主様に心より感謝申し上げます。

（ネパール・カトマンズ）

手のシッシン

浄化作用によって命の継ぎ足しを…

篠栗支部
三輪亜紀子（50）

私は両親が新健康協会の会員だったこともあり、幼い頃から浄霊を受けて育ちました。そのため私は薬や注射に頼ることなく元気に過ごすことが出来ました。

平成五年四月、私が二十歳の時、突然両手全体がかゆくなったので掻いていると、少しずつかゆみが増していき、気が付くと毛穴から汁が出ていました。すると数日後、今度は汁と一緒に膿が出てくるようになり、指同士がくっつくようになりました。次第に手の甲や指が腫れていき、両手共親指以外は動かせないような状態になってしまいました。この状態が二ヵ月間続いたので、手が自由に使えず不自由な部分もありました。しかし、浄霊を受けていると、少しずつ膿が出て、その都度ゆっくりですが、手の腫れが引いていくのが分かりました。

私自身、不安や心配はありましたが、いつも浄霊で元気になり、今まで健康に過ごすことが出来ていましたので、この時も明主様にしっかりお願いして、浄霊で元気になりたいと思いました。

そして二ヵ月が過ぎた頃、一度にたくさんの膿が出始め、それに合わせて手の腫れも治まりました。両手には、膿によって出来たかさぶたがあったのですが、それも徐々に取れていき、その下からはきれいな皮膚が見えるようになりました。良くなっていく様子を見ることが出来、本当に嬉しかったです。そして、くっついていた指が次々に離れて自由に動かせるようになって、両手で顔を洗うことが出来た時、涙が出るほど嬉しくて、心から明主様に感謝申し上げました。

この素晴らしい浄霊を、一人でも多くの方にお伝えしていきたいです。

誠に有難うございました。

（福岡県糟屋郡）

浄　霊

浄霊は、大自然のエネルギーであり、病気やあらゆる問題で苦しんでいる人、悩んでいる人を救う方法です。

浄霊によって魂は清浄化され、肉体が健康になっていきます。

まずは試されてみてはいかがでしょうか。

晴明会館全景

「山の景」展 開催のご案内

日本列島は豊かな山林の緑に恵まれています。日々の暮らしの糧や住まい、燃料をもたらす山は、生活に身近な存在であると同時に、畏怖するべき信仰の対象でもあります。やきものの窯場の多くは山中に築かれ、絵画においては長らくその神秘性をこそ描き出そうとされてきました。

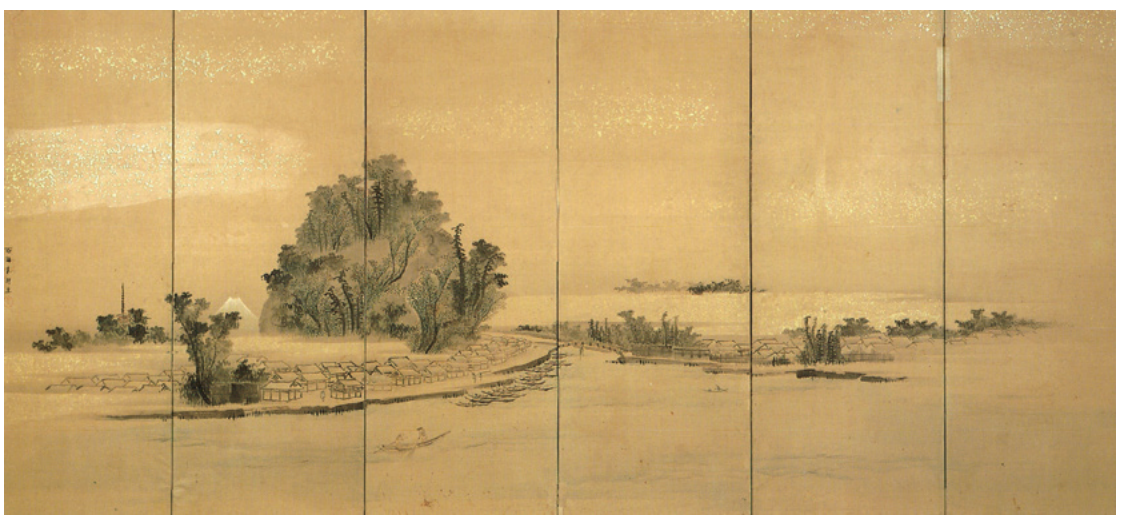
中国で漢時代に興ったとされる山水画は広く東アジアに伝わり、日本では主に宋・元・明時代のものを範とした水墨画が、室町時代に全盛期を迎えます。山水画は名前の通り、山岳や渓谷が描かれますが、それはもともと神仙の住処を表すもののため、現実にある景色を再現する意識は高くありませんでした。特に日本では、その観念と中国の風景を描いた図様を学んで取り入れていることもあり、山や樹木、岩などの形を再構成したものが多いのです。

さらに平安時代に遡ると、和歌の歌枕として詠まれた名所を描いた名所絵が成立していたと言われていますが、そこに描かれている光景もまた景勝地を写したものというよりむしろ和歌や物語の場面を連想させるためのもので、やまと絵はそうした目に見えない文学的な要素を根本にもって展開してきたといえます。

しかしそんな日本においても富士山は特別です。古来から霊山として拝され、和歌や物語にも登場し、実際に備えている特徴をもった姿で描かれてきました。近代以降は日本の象徴とされるほどの名山となり、近世から取り入れられてきた西洋的な表現方法の普及によって、より写実的な富士山が描かれるようになりますが、そこでも神々しさを表すことは忘れられてはいません。

本展では、このように日本の美術にとって重要な存在である「山」をテーマに構成します。自然環境についての意識が高まる現代を生きる私たちにとっても、山の大切さは増すばかりです。富士山をはじめとしたさまざまな山を描いた絵画や、山で生み出されたやきもの、自然の緑を想像させる作品などを通して、山と私たちとの関係を振り返る機会になると幸いです。

解説　松田愛子



寸法（高さ 170㎝×幅 360㎝）

「待乳山」屏風（左隻）葛飾北斎

晴明会館　「山の景」展

期間：令和６年10月１日(火)～令和７年５月13日(火)

※晴明会館お問い合わせ ☎(092)661－1535

健康新聞についてのお問い合わせは(092)661－1531まで